2018/02/22中原キリスト教会祈祷会

聖書箇所：使徒の働き10:1-33

　　　　　　　　　　　　**「百人隊長コルネリオとペテロ」**

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日の聖書箇所は、ローマ帝国の百人隊長コルネリオのお話です。使徒の働き10:1—11:18までがコルネリオに関連するお話しであり、使徒の働きのお話の中でも最も長い話になります。お読みいただいたのはこのお話の最初の部分です。概略を申し上げますと、次の通りです。カイザリアに駐留していたローマ帝国の軍隊の百人隊長の一人コルネリオに神の御使いが現れ、ヨッパに居る主イエスの使徒の筆頭格のシモン・ペテロを呼びなさい、と言います。他方、ペテロにも神の霊が臨み、地上のあらゆる動物が示され「ほふって食べよ」と命じられます。ペテロは抵抗しますが、「神が清めた物を、きよくないと言ってはならない」という神の言葉が三度聞こえてきます。ペテロが“この幻は何をいみしているのだろう”と考えて居ると、コルネリオの使者がペテロの所に来て、百人隊長コルネリオが招いている、と伝えます。ペテロの一行がコルネリオの家につくと、コルネリオは「ペテロの足元にひれ伏して拝んだ、と記されています。ペテロは集まった人々に証（あかし）をします。その内容は異邦人への福音の証言です。ペテロに示された幻は「どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられる」というメッセージなのだという事です。すると、ペテロの話しを聞いていたすべての人に聖霊の賜物が注がれました。使徒の働き第2章に使徒たちに聖霊が降ったペンテコステの話がありますが、このコルネリオの物語りの所はいわば異邦人への聖霊降臨です。「異言を話し、神を賛美した」というのも使徒への聖霊降臨のときと同じです。そしてイエス・キリストのみ名によるバプテスマが与えられます。他方でユダヤに居たユダヤ人キリスト者はペテロたちが異邦人と食事をしたことでペテロを責めていました。ペテロはエルサレムに行き、弁明をします。彼は自分に幻が与えられ、神が与えた食べ物はすべて聖なるものであり、律法の食物規定は異邦人に要求するべきことではないことを述べます。そして、神がペテロたち使徒へと同様の賜物を授けたのだから、それを受け入れ異邦人への福音を主の御心と知るべきだ、という趣旨のお話しをします。一同は沈黙し、最終的には「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言ってこれを受け止めます。

　ここで、異邦人へも平等に福音が語られるべきであり、ユダヤ人の枠を超えて世界中に福音が述べ伝えられ事が主の御心である、ということが明確に示されています。ペテロも最初は抵抗感もありましたが3度の神の声で主の御心の奈辺にあるかを悟り、自らも異邦人にむけ説教を行うようになるのです。異邦人伝道にそのすべてを奉げた代表的人物にパウロがおりますが、パウロが本格的に異邦人伝道に向かう前に、コルネリオの物語りを通して異邦人伝道の素地が作られていたのです。使徒の筆頭格であるペテロが抵抗感を持ちつつも、異邦人伝道においてユダヤ教の律法は絶対的なものではない旨を受け入れるのです。ユダヤ教の律法で厳格な遵守を求められた項目としては「割礼」、「食物規定」、「安息日」がありますが、このコルネリオの物語りで、「割礼」、「食物規定」の二つが相対化されています。サウロの回心の話は9章にすでに述べられていますが、まだ、伝道の働きにまで至っておりません。

実はこのコルネリオの話の前にも異邦人伝道の話があります。使徒の働き8:26-40にピリポのエチオピア人伝道の話があります。ここに登場するピリポは使徒ピリポではなく宣教者ピリポと呼ばれている人物です。使徒たちによってエルサレム教会の執事として選ばれたギリシャ語を話すユダヤ人の7人の弟子の一人です。「七人の一人」とか「助祭ピリポ」とか「伝道者ピリポ」と呼ばれています。そのピリポがエルサレムからガザに向かう途上、エチオピア女王の宦官と会います。そると彼はイザヤ書の53章を読んでおり、ピリポに教えを請います。ピリポは主イエス・キリストのことを預言しているのだと解き証し、イエス様のことを述べ伝えます。そしてピリポは彼にバプテスマを授けます。これがキリスト教の異邦人伝道の先駆け、と言えると思いますが、これとコルネリオの物語りとを比較すると、コルネリオの物語りに出てくる異邦人伝道はずっと本格的です。エチオピアの宦官の話は、イザヤ書の預言の話から主イエスの救いの業に到る御話しですが格別異邦人に向けられた話ではありません。ピリポの話を聞く者が、たまたま異邦人であったと言うにすぎません。コルネリオの物語りの場合は、神様が異邦人にも平等に主イエスの福音が与えられる、ということを明確に言っており、異邦人伝道の出発点と言って良いでしょう。ちなみにエチオピアはAD4cに教父フラメンティウスの宣教によりキリスト教国家になりました。今もエチオピア正教として多くの信者を擁しています。長い間、エジプト・コプト教の一部とされていましたが、1959年に独立しました。エチオピア正教の建国物語ではソロモンとエチオピア女王の間に生まれたメネリク1世を建国の粗としています。また現在エルサレムにエチオピア正教の教会もあります。各種キリスト教の共同管理となっている聖墳墓教会も嘗てはエチオピア正教会が守護者であったとのことです。この派の十字架は菱形をかたどった十字架であり特徴的です。私たちは、ローマ・カソリック、プロテスタントキリスト教くらいしか知りませんが、世界には実に多様なキリスト教があるのだ、ということは心に留めておくべきであろう、と思われます。ギリシャ正教、ロシア正教にとどまらず、レバノンにあるマロン派キリスト教、トマスが伝道したと言われるインドのトマス教団、景教の名で日本にまで伝わったとされるネストリウス派キリスト教、果てはバプテスマのヨハネを最後の預言者とするマンダ教というのも残っています。いずれにせよ、私たちがキリスト・イエスの弟子とされるようになるまでには長い、異邦人伝道の歴史が背後にあるのだということです。コルネリオの回心・受洗はその出発点です。

聖書に於いて異邦人はどのように扱われてきたのでしょうか。ペテロは10:27-28で「それから、コルネリオとことばをかわしながら家に入り、多くの人が集まっているのを見て/彼らにこう言った。「ご承知のとおり、ユダヤ人が外国人の仲間に入ったり、訪問したりするのは、律法にかなわないことです。ところが、神は私に、どんな人のことでも、きよくないとか、汚れているとか言ってはならないことを示してくださいました」と言っています。本当に聖書は「ユダヤ人が外国人の仲間に入ったり、訪問したりするのは、律法にかなわないこと」と言っているのでしょうか。そのようなことは律法の書にありません。むしろ寄留の民を守れ、とも言われています。詩篇146:9では「主は在留異国人を守り、 みなしごとやもめをささえられる。 しかし主は悪者の道を曲げられる」と言っています。ルツ記、ヨブ記のように異邦人が主人公の旧約文書もあります。しかし、他方で異邦人に対し極めて排他的な態度を明らかにしている箇所も多々あります。古いところでは、創世記9:29でノアが「のろわれよ、カナン」と言った言葉が思い起こされます。ヨシュア記を始め、歴史書は他の近隣民族に対する排他的な態度を示しています。イスラエルの神ヤハウェ―に対する信仰の純粋さを維持するのには異邦人は有害である、という考え方です。この考えは、捕囚の民がユダヤに帰還し、神殿再建に向かう中で、強固になって行きました。ハガイなどの指導によって確立していったユダヤ教にはこの異邦人に対する排他性が色濃くありました。イザヤ、エレミヤ等の預言者の伝統はイスラエルの罪の結果、イスラエルは苦難に宿命づけられているというもので、異国の民がイスラエルの苦難の原因ではない、というものです。むしろ、異邦人への期待さえ感じられます。このように旧約聖書の異邦人に対する態度にはいろいろ屈折したところがあり、単純ではありません。むしろ、異邦人に対する好意と敵意が織りなされている、と言えるであろう、と思います。この二本の糸が絡み合っているのがイスラエルの歴史です。イエス様の宣教や使徒の働きの時代のユダヤ教はパリサイ派が力を持って居ましたが、正統派パリサイ人は、ハガイ以来の伝統を尊重し、異邦人に対してはかなり排他的な態度を採っていました。しかし、新約聖書ははっきりしています。イエス様は罪人とされていた人々こそ神の力の現れる場とされておりましたが、この教えは、異邦人に対しても福音は及ぶとするのは当然のことです。この意味で、イエス様は異邦人に対する好意と敵意の争いに決着をつけた方である、とも言えるでしょう。従って、コルネリオの物語りはイエス様の教えの当然の帰結である、とも言えます。

このことは「選ばれた民」ということに、屈折した感情を持ってきた、パリサイ派的ユダヤ教のなかで育ったユダヤ人キリスト者にはすんなりと受け入れられるものではなかったのです。10:11でペテロに現れた幻は地上のあらゆる動物、鳥でした。これは創世記7:14のノアの方舟に入れられた動物たちを思い起こさせる表現です。ノアの家族「彼らといっしょにあらゆる種類の獣、あらゆる種類の家畜、あらゆる種類の地をはうもの、あらゆる種類の鳥、翼のあるすべてのものがみな、入った」と言われています。ノアの方舟に乗った生き物のみがこの地上に生き残ったとされている訳ですから、ペテロに示された幻はすべての動物を指すものであり、ひいては神の被造物はすべて清い、と言っていることになります。要すればユダヤ人の墨守してきた食物規定を無意味のものにしてしまっているのです。このことはこのような食物規定の外にある異邦人に対し、この遵守を求めるべきではない、と宣言しているのです。ペテロは抵抗します。神の声であると分からない場合に抵抗するのはおかしい事ではありませんが、10:14-16で示されているように神の声と分かったうえでペテロは三度抵抗しているのです。おそらく、食物規定を破ることは彼にとって生理的嫌悪感にまで至っていたと想像されます。字義通りには食物規定を守っても差し支えはないのですが、この規定に縛られない異邦人と共に食事をするときはこの禁を破らざるをえなかったのではないか、と思われます。それがエルサレムのユダヤ人キリスト者の批判するところだったのです。インド人の牛、ユダヤ人やイスラム教徒にとっての豚など世界には食物上のタブーが沢山あります。いろいろ科学的説明なる解説もありますが究極的には「神が命じた」という以外の理由はありません。これに比し、私たち日本人は食物におけるタブーを持たない中国文化の影響もあり、このようなタブーは歴史的に持って居ません。もちろん、私たちキリスト者は主イエスの教えによってユダヤ人の食物タブーからも解放されています。

10:2ではコルネリオのことを「彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神に祈りをしていたが」と記しており、これはイスラエル信仰の模範のような人であったという事を言っています。ここで神を恐れかしこみ、と言われている言葉はギリシャ語で「fobo:mai」ですが箴言1:7の「主を恐れることは知識の初めである」という時の「恐れ」のギリシャ語訳「fo:bos」と同一系統の言葉です。イスラエルの信仰から見て敬虔な人物であった、ということです。また「ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神に祈りをしていた」といわれています。施しは申命記15:11でイスラエルの義務とされていました。「貧しい者が国のうちから絶えることはないであろうから、私はあなたに命じて言う。「国のうちにいるあなたの兄弟の悩んでいる者と貧しい者に、必ずあなたの手を開かなければならない。」」といわれています。イスラム教でもザカートと称し、施しが義務とされています。イエス様の言葉にも施しを勧める言葉があります。要するにコルネリオはユダヤ人の基準から見て敬虔なユダヤ教徒のようだったという訳です。

このあとにペテロを批判する人々、即ちユダヤ人キリスト者を「割礼を受けた者」と言っていますからコルネリオは割礼を受けてはいなかった、ということになります。「イタリア隊の百人隊長」と言われています。イタリア隊というのはローマの兵隊のなかでもローマによる占領地から募った兵士によって構成されていたのではなく、ローマ帝国直轄の軍隊ということでしょう。日本の江戸時代で言えば旗本でしょうか。ローマ皇帝の直轄であり親衛隊の出先機関と言っても良いと思います。要するに、ローマ帝国軍のなかでもエリートであった、という訳です。ユダヤ教徒でもないのにイスラエルの主なる神に祈りを奉げ、カイザリヤのユダヤ人に施しをしていた、というのです。おそらく、ユダヤ人キリスト者のことだろうと思われます。当時のユダヤ教にはパリサイ派、サドカイ派、エッセネ派がありましたが、ユダヤの外での話ですからユダヤ教ではパリサイ派しか影響力を持っていた教派はありえません。しかし、先に申し上げたように、割礼を受けているのでもなく、ユダヤ人の食物規定を守っている風でもありません。もうすでにキリスト者になっているかの如き行い、なのです。これはどうしたことでしょうか。そのようなローマ帝国軍人などいたのでしょうか。

ここで「百人隊長」ということで福音書を見てみましょう。一人の百人隊長は、イエス様によって僕がいやされた人物です。マタイ8:5-13と並行記事がルカ7:1-10にあります。ルカ福音書の方を抜粋でお読みします。「イエスは、---カペナウムに入られた。/ところが、ある百人隊長に重んじられているひとりのしもべが、病気で死にかけていた。/百人隊長は、イエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、しもべを助けに来てくださるようお願いした。/イエスのもとに来たその人たちは、熱心にお願いして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。/この人は、私たちの国民を愛し、私たちのために会堂を建ててくれた人です。」/イエスは、彼らといっしょに行かれた。そして、百人隊長の家からあまり遠くない所に来られたとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスに伝えた。「主よ。わざわざおいでくださいませんように。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。/ですから、私のほうから伺うことさえ失礼と存じました。ただ、おことばをいただかせてください。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます。/と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ』と言えば、そのとおりにいたします。」/これを聞いて、イエスは驚かれ、ついて来ていた群衆のほうに向いて言われた。「あなたがたに言いますが、このようなりっぱな信仰は、イスラエルの中にも見たことがありません。」/使いに来た人たちが家に帰ってみると、しもべはよくなっていた」とあります。この百人隊長の信仰にイエス様が驚かれた、と言われています。この話はイエス様が伝道を開始されて間のない時のことです。ガリラヤ湖の海岸の大きな町カペナウムでの話です。

福音書にはもう一人百人隊長が登場します。イエス様の十字架の出来事の直後の事です。場所は当然のことながらエルサレムです。マタイ27:54、マルコ15:38、ルカ23-47-48がその箇所です。やはりルカ福音書で見てみましょう。23:46-48には「イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。/この出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえ、「ほんとうに、この人は正しい方であった」と言った。/また、この光景を見に集まっていた群衆もみな、こういういろいろの出来事を見たので、胸をたたいて悲しみながら帰った」とあります。主イエスの十字架の場面を見て「ほんとうに、この人は正しい方であった」と言ったと言われています。マタイ福音書とマルコ福音書では「この方はまことに神の子であった」と言っています。主イエスのことを「神の子」と言っていることから見てイエス様への信仰に近い表現だと言えます。

福音書には以上の二人の百人隊長が登場します。僕をいやされた百人隊長と主イエスの十字架の側にいた百人隊長です。福音書記事の年代推定で言いますと僕をいやされた百人隊長はAD28年夏頃、主イエスの十字架の側に居た百人隊長の話は十字架の出来事の時ですからAD30年の4月です。コルネリオという百人隊長の話はパウロの回心のすぐ後、ということで推定すればAD32年頃と考えられます。ローマ軍の、親衛隊的な部隊のこの地に於ける拠点はカイザリヤですが必要に応じ、他の都市に駐屯したはずですから、コルネリオの部隊がガリラヤの中心都市のひとつであるカペナウムにおり、主イエスの十字架の側にいた百人隊長の話がエルサレムでの出来事でもなんの不思議もありません。ガリラヤはAD6年に「ガリラヤのユダの反乱」が起きた地でもありますから、カペナウムに百人隊長が駐留していてもおかしくありません。

ではこれらの百人隊長はすべて同一人物である、と言って良いでしょうか。少なくとも聖書にはそう推測する箇所は全くありません。10:25をみるとコルネリオはペテロの足元にひれ伏して拝んだ、とあります。この「拝んだ」というギリシャ語は「proskyu:ne:o」という言葉ですがそもそもはギリシャ人がギリシャの神々に平伏して床や地、足または衣服の裾に接吻していたことから、接吻する（kyu:ne-o）という言葉から派生した言葉です。ペテロは「そんなことをしてはだめです」と言うのですが、此処では主イエスとその弟子を自らの王に対するように行動していることがわかります。僕をいやされた百人隊長はマタイ8:8で「ただ、お言葉をください。そうすれば、私の僕は直ります」とイエス様の言葉に絶対的信頼をおいています。主の十字架の場面を見た百人隊長は「この方はまことに神の子であった」と言い、主イエスを「神の子」と明言しています。またイエス様を崇敬するに至ったローマ軍の百人隊長が多くいたとも思えません。これらのことから、福音書に登場する二人の百人隊長は実は使徒の働きに登場するコルネリオのことなのではないか、という推定も十分成り立ちうる、と思われます。

しかし、ここに十字架の出来事に立ち会った百人隊長についてのキリスト教における伝承があります。これは『ピラト外伝』という新約の外典に出てくる話が契機になっています。それは、この百人隊長はロンギヌスと言い、イエス様の生死を確かめるために左わき腹に槍を突き刺した、というのです。彼は白内障を患っていたが、槍で刺した時イエス様の血が目に入り、視力を取り戻した、というのです。そしてこのことから回心をし、洗礼を受けた、というのです。中世の画家フラ・アンジェリコに「イエスの脇腹に槍を指すロンギヌス」という絵があります。またこの時の槍が聖遺物として受け継がれフランス王ルイ9世が手に入れたとか、まことしやかな話があります。他方、ある現代のカソリックの神父さんは、このロンギヌスはコルネリオのことだと言っています。ロンギヌスという名前はギリシャ語の槍（logche）から来ているのではないか、という説もあり、名前はコルネリオだった、という可能性もある、とは思います。百歩譲ってこの十字架に立ち会った百人隊長はコルネリオではなかったとしてもカペナウムでの僕がいやされた百人隊長はコルネリオのことだと推測する余地はあります。主イエスを完全に信頼し、その御言葉により自分の僕が癒されるよう懇願した百人隊長にコルネリオの面影を見ることはできます。もしそうだとすれば、たまたま駐在していたカペナウムで主イエスのうわさを聞き、部下や僕（しもべ）思いのコルネリオは中風の僕を直していただこうとイエス様への懇願に到ったのです。そして僕をいやされ、「このイエスという方は神の使者に違いない」として敬愛するようになっていった、と思われます。その後も彼は本拠地カイザリヤに戻され、そこに駐留していたが、イエス様のうわさは聞いたでしょう。そして十字架と復活のうわさも聞いたでしょう。そしてカイザリアで主イエスの弟子ペテロがヨッパに居るということを知り、自分の所に招くことにしたのです。僕がいやされた経験から4年後の出来事です。そして聖霊降臨の恵みも経験し、洗礼を受けるにまで至ったのです。これぞ、異邦人キリスト者が広がって行く契機となりました。これぞ神の導きというものでしょう。私たち日本人キリスト者もこのコルネリオの系譜に在る者です。二千年以上も主イエスこそキリストであることを証している群れの一員なのです。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、この祈りの時を感謝致します。僕をいやされた百人隊長、十字架の側にいた百人隊長、そしてペテロを招待した百人隊長の三人の百人隊長が出てきます。この三人の百人隊長の話は、主イエスの福音が異邦人に述べ伝えられていく一歩、二歩、三歩になっています。これら百人隊長はいずれも、イスラエルの信仰の基本を共にする者でした。どうぞ、私たちを、これらの百人隊長の信仰に連なる者とさせて下さい。救い主、イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）